

「いないと困る！」

そんな頼もしい先生だからこそ、**鳴教の教職大学院**へ。

頼れる、頼られる先生は、誰しも高い自己研鑽への意欲を持っているものです。その意欲に応えて、より高い“教師力”を身に付けてもらうことをめざすなら、研究と実践のバランスと融合が特長の教職大学院が最適です。

「研究と実践のバランス」鳴門教育大学では、ハイレベルな研究者教員と、幅広い現場を知る実務家教員とがチームを組んで指導に当たります。指導教員は学生と共に勤務校を訪ね、1年次には勤務校の学校課題アセスメントを、そして2年次にはフィールドワークを通じてその課題解決をめざします。「貴重な中堅教員がいなくなると困る」という声をよくお聞きします。しかし、その先生が修了後に力を増して帰ってくるだけでなく、大学院在学中にも、勤務校にとって大きなサポートが得られるのです。

教師力UP

教職大学院がめざすのは、中堅リーダー教員の育成です。ここで学んだ先生には、帰任した勤務校はもとより、そこから転属する学校、ひいては地域の教育界に資することのできる力が身に付くことでしょう。教育の明日を担える人材の育成には、ぜひ教職大学院をご活用ください。

学校力UP

地域力UP



◆お問い合わせ

鳴門教育大学 教職大学院コラボレーションオフィス
電話：088-687-6598 ファクシミリ：088-687-6694 E-Mail：collabo@naruto-u.ac.jp
鳴門教育大学ホームページ <http://www.naruto-u.ac.jp/>

いち教員の“教師力”を磨くだけでなく、その力を勤務校(置籍校)の、そして地域の教育を変えていく力にまで高めていくこと。それが鳴門教育大学・教職大学院のミッションです。

自分の力を高めるために

「初任から13年目を迎えたそのころ、教職大学院を志望したのは、ここで自分の専門性を高めておきたいという思いからでした」

そう話すのは、教職大学院での研究を終え、今また現場で活躍中の森本英己先生です。

「私は長らく体育主任を務め、学級経営でも体育科を中心に据えてきました。ですが、当時の勤務校では、子どもたちの体力低下がひとつの課題になっていました。もともと徳島県



森本英己先生

現・徳島県鳴門市立里浦小学校勤務



の小学生の体力は全国でも最下位レベルでしたが、自校でもその傾向を強く感じていたのです。そこで、自分の授業力を高め、体育指導を改善することで、その状況を良くしていきたいという思いから、教職大学院行きの希望を出しました。校長先生もそんな気持ちを汲んでくださり『分かった。ぜひ勉強してきなさい』と送り出してくださったのがありがたかったですね」

開けていく視野

そうして念願の研究機会を得た森本先生は、早速、鳴門教育大学の教職大学院の特徴に触れることになりました。「鳴門教育大学の教職大学院には3つ(学卒者対象の教員養成特別コースを加えると4つ)のコースがありますが、1年次の前半では、すべてのコースが共通科目を学ぶことになって

CASE 1: 開けた視野、変わる学校

だから 鳴教

リーダー教員育成のための 三層構造カリキュラム^(※1)

鳴門教育大学教職大学院がめざすのは、専門的知識と実践的な指導力を兼ね備えたリーダー教員の育成です。

設置コースは、主に現職教員を対象とする「学校・学級経営コース」、「学校臨床実践コース」、「授業実践・カリキュラム開発コース」、そして学卒者を対象とする「教員養成特別コース」の4つ。これら全コースの学生が履修する「共通科目」、各コース・領域群ごとの「専門科目」、そして連携協力校等で行う「実習科目」の三層構造カリキュラムを通じて、学校が直面しているさまざまな課題を構造的・総合的な理解の上で解決していく力を養います。

とりわけ共通科目においては、集団討議やワークショップ、フィールドワークやシミュレーション、ロールプレイング等の手法を広く取り入れ、教師力の基盤をしっかりと形成。この土台の上に、高い専門性と実践力の柱を立てていくのが「鳴教流」です。

鳴教教職大学院の魅力 S.I.T.E とは^(※2)

鳴門教育大学教職大学院の大きな特色である S.I.T.E (School Involvement Teacher Education) とは、OJT と大学院専門教育の接合による教師教育のことです。学校課題を実習課題ととらえて共有し、大学院生と大学教員、そして連携協力校(勤務校・置籍校)の先生が一体となって、その課題の解決に取り組めます。学校の改善と一体となった教師教育こそが、本大学院の大きな魅力です。

改善」の枠を超え、子どもたちの学校生活の中に、体を動かす取り組みを定着させ、習慣化させることへと広がっていきました」

鳴門教育大学教職大学院のもうひとつの特徴が、S.I.T.E (※2) に基づく勤務校の学校改善への協力と貢献です。森本先生の研究は、綿密な調査と考察を経て、自分の授業力向上や授業改善にとどまらず、学校全体の取り組みを通じて子どもたちを変えていきたいという広がりを持つことになりました。そこからスタートするのが、勤務校と連携した具体的な取り組みです。

「そこからが研究の本番でした。いくつもの仮説を立て、それに基づくプランを作っては勤務校の先生方に投げかけ、少しずつ理解と協力を得ていったのです。実践の舞台は体育の授業にとどまらず、始業前や中休み、特別活動の時間を活用した学校ぐるみのものになりました」

この段階では院生本人だけでなく、その指導教員が一体となって、勤務校での研究と学校改善に取り組んでいきます。「この間、村川先生と共に勤務校を実際に訪問しながら意見を交わし、またいくつものフィードバックをいただきながら、仮説や実践プランの修正を重ねることができました。研究室の中での研究に終わらず、自分の勤務校にも貢献しながら、実践的な研究をすることができたのは、やはりここ、鳴門教育大学の教職大学院だったからだと思います」

こうして進められた森本先生の研究は、同時進行で勤務校にて実践され、学校と子どもたちを変える成果を上げています。

教師力を磨きながら、同時に勤務校に貢献し、実際に子どもたちを変えていく。森本先生の充実感に満ちた笑顔は、本大学院でのその豊かな学びの証しです。



います。ですが、そこには公約数的な内容だけでなく、各コースのエッセンスがたっぷり含まれていました。私は授業実践・カリキュラム開発コースを選択していたのですが、この段階で他のコースのテーマ、例えば特別支援学級での指導のあり方などを、ワークショップなどを通じて体験的に学ぶことができ、いろいろな気づきを得られたことが強く印象に残りました」

「高い専門性を備えるためには、幅広い裾野が必要」というポリシーから生まれたこのカリキュラムは「広く浅く」ではなく、逆に研究の中心課題を客観的に見つけ、それを深めていくために欠かせないプロセスと位置づけられています(※1)。

子どもたちの全部を見つめて

「そんな気づきを得ながら、指導教員の村川雅弘先生と向き合っ、自分が大学院に持ってきた課題を改めて検討しました。そこで見えてきたのは、『体力低下』が、すべての子どもに一律の課題ではないということです。体育が好きで得意な子と、

苦手で嫌いな子ども間の格差というものがあり、それが二極化している状況が分かってきたのです」

日々の授業の中からはハッキリそれと見えなかった課題の姿が、大学院での幅広い学びと気づきの中で浮かび上がってきた。森本先生はそう言います。

「そこから進んで見えてきたのは、その原因についてでした。授業のような与えられた場では、それなりの運動(遊び)に取り組むことができる子どもたちも、放課後や休日などに自ら進んで体を動かすことは多くありませんでした。となれば、基礎的な体力のありようは、むしろ日常的な生活の中で決まってくるのではないかということです。それを授業の中だけで改善しようとするれば、先に言った格差のようなものが、むしろ拡大してしまう場合もあるのではないか。そう気づかされたのです」

学校ぐるみで挑む「チェンジ」

「こうして課題の姿が見えてきたところで、私の研究は『授業

森本先生の研究概要とその成果

児童の体力・運動能力向上のための全校的取り組み ～学校や家庭で自ら進んで体を動かし、体力を高めていこうとする児童の育成～

Research

子どもたちの体力・運動能力の低下傾向という課題意識から出発。勤務校での調査を経て、子どもの運動有能感や運動への取り組みの二極化、自発性の低さなどを課題としてとらえ、その解決に取り組むことに

Plan

- ・勤務校(鳴門市立桑島小)への課題伝達
- ・ワークショップによる課題の掘り下げ
- ・目標の共有
- 「遊びや、身体を動かす様々な経験を積ませ、体力向上をめざそう」
- 「友達とコミュニケーションを図りながら活動できる子どもを育てよう」
- ・合意を軸にカリキュラム作成
- 「全校的かつ継続的」「特別活動の充実」
- 従来は清掃等を行っていた特別活動時間を活用。さらに中休み20分を加え、6年生をリーダーとする縦割り班での活動を決定
- ・「くわっ子元気アップシート」開発
- 遊びのルール等をイラスト入りで記したシートを作成。また校内各所に遊び場を確保し、「活動の場所マップ」を掲示

Do

- ・6月より実践スタート
- ・夏休み前までに計6回実施
- 開始当初は緊張が目立った子どもたちも、6年生のリーダーシップが発揮され活動の進行がスムーズになるにつれ、笑顔が増えていった



遊び道具はすぐ持ち出せるように遊びごとにカゴにまとめられている。

Check

- ・夏休み前の活動終了時に評価を実施
- 児童：アンケート/教員：ワークショップ
- ↓
- ・約7割の児童が活動に好印象。
- 「新しい遊び」「他の学年の友達」「自分たちでルールなどを工夫する楽しさ」
- ・児童に対する課題
- 高学年のリーダーシップのさらなる向上
- 子ども同士のコミュニケーション向上
- ・活動への教員の関わり方も今後の課題に

ワークショップに取り組む先生たち。取り組みは校内研修のスタイルを変えるきっかけにもなった。



Action

- 前期の反省から、10月以降の目標を設定
- ・10月～12月で計9回実践
- ・高学年のリーダーとしての資質向上
- 「活動予定・振り返りシート」導入
- 予実の記入を通じて意識を高める
- 「チャレンジカード」導入
- 3、4年生に積極的な取り組みを促す
- ・活動中のコミュニケーション活性化
- ・体力向上をより意識した取り組み
- ・教師の関わりによる課題解決支援
- 「教師用活動振り返りシート」導入
- 記入内容を「くわっ子元気アップ通信」にて随時発信し、共有化
- ↓

結果、子どもたちの活動はさらに活発化し、活動中のコミュニケーションも盛んに

Conclusion

- ・遊ぶ場やその機会の提供
- 子どもたちが自ら進んで体を動かすようになる可能性が高まる
- ・活動中のコミュニケーション
- 子ども同士の仲間意識を育てる
- 放課後や休日に自ら進んで体を動かそうという意欲向上につながる
- ・教員からの前向きな評価増
- 体育の時間のヒントにも
- ・実践に先だって組織作りが必要
- 全教職員の理解と協力があったこそ
- ・ソフトとハード両面で課題
- 遊び内容の検討、時間、場所、道具の確保
- ↓
- ・子どもたちの体力向上のために
- 取り組みを継続し、改善を重ねる必要性



子どもたち自身がこれを参照して遊びに取り組める「くわっ子元気アップシート」。イラストはなんと森本先生の手描き!